

鴉
の
齋



詩集

鴉

の

裔

高木

恭造

著

畏

友

一

戸

謙

三

氏

仁

1

1938

東
方

ゆめかけるやへのしほぢに
ゆきつもあるしまねしづもる
わきあがるよあけのうたに
ゆらめくほくものいぶきよ

ふきならすこがねのふえに
ふるへるそらくだけるいわ
ほめうたはなみとどよめき
ほのほのとかみはゑまひぬ

鴉の齋

くらい風に光るものよ
苦しみは水のしはぶき
梢にもらす告のことは
雲の影匍ひよるけはい

枯葉さわぐ夜の庭に
かたちなき言葉群がる
くひ散らす鴉の齋すゐ
かしましく凶まがごと叫ぶ

刻むべき言葉もあらず

かすかなる光も消えて

きしむ胸もだえは歌に

神はあらずわれは臥しぬ

ことば散りてわが心よ

風はしろく梢にふるふ

潤れた泉 朽つる木の葉

影はほそり歌は死せり

北方

歪む雲にひゞきおこり
火花ちりて闇はよどむ
極みなき空のはたてよ
ひとみなは諸手に捧ぐ

若き日

若き日は濁れる空に
笑もなくひね曲りて
わびしくも唇かみぬ
わが暮し憎しみにみつ

夏の歌

夏は来ぬ去年のごとくに
汝もまたかくおもふらめ
なぐさめは海にしづみぬ
なぎさべの貝のごとくに

河原にて

河原しろく魚は見えず
風おこり想ひは消えて
語るひといまはあらずも
影はうすれ石も冷えて

呂律なき歌

呂律なきわが歎きぶし
路地の奥ひそかに歌ふ
戸辺の虫われに真似せよ
蠟燭のとほれ待たなく

時間

時はくだけちる雲母だ
止めどもなく剝げる脆さ
飛び交ふ羽に似た軽さ
とうめいな流れの縞よ

くらい庭

オルガンに濡れた花束

をとめの髪の黒リボン

萬年青の花 啼きよる猫

小止みない雨 くらい庭

皿

透明なタマゴとサカナ

トランプの女王と兵卒

鳥籠はからつぼである

時計には文字盤がない

2

1936-37

黄河

河はあまりにも老ぼれてゐた。その年齢を忘れてゐる程に。
もはや何物をも弁へ得なく、絶えずいらいらし、気短かにがなりた
てる。

追憶の涙を流してゐるのかと思へば、陽なたぼつことをしながら、た

わいもなく眠つてゐるのだ。

それがいま末期だと思はれる程に暴れだしたので。

跳ね上り、のたうち廻り、もはや制し得べくもない。

その一切を吐泻せんとするうめき、叫び。

はては虚空をひつつかんだまゝ、どうと倒れた巨體。

埋没した歴史の泥沙は掘りかへされ、

氾濫した人類苦虐の汚吐物。

断末のうめきに喘ぎながら、

河はなほそのだゝつ広い背中で、濁つた天を支へてゐる。

河は一夜にしてその河道を変へてしまった。

落葉

明るい硝子戸を隔て、聴くピアノ即興曲。

木の葉らは散りながらもおしやべりを止めない。

蝶類や小鳥の真似をしてみても

忽ちに死骸となつて庭を埋めつくす……

静謐な短い休止符。^{ペウゼ}

澄んだ空は梢を砥いでゐる。

そしてひつそりとした昼の月が……

突然、石のやうに黙つて落ちる木の葉がある。

わたしの心に残るそのにふい単音。

ピアノの音は止んでしまった。

睡眠

夜々の眠りは死への飛込み練習である。

ピジャマを着けたダイウイング。

真逆さまに落ちてゆく軽い不安——

そして白い夢の泡を残して明日へと浮び上る。

かくてわたしらの生が終る時

わたしらは容易く死の底へともぐりこんでゆく……

断章

——
モンゴウルの幻想

一枚の古い地図を拡げる。釣洋燈の下で。

地図の上に匂ふ一つの気流がある。

わたしはそれを胸いつばいに吸ふ。肉體を忘れるまでに、やがてわ

たしの魂が羽搏くだらうと。

乾いた草原が展がる。

わたしはその上に自分の影を拾ふのだ。

影の落ちた方向。

それはわたしの行手だと。

夜はわたしを呑んでしまふ。

夜は奇術の黒幕のやうに諸々のものを繰り展げてみせる。
それはわたしを脅しもある。なま暖い死の懐のやうに。

沙漠の獣等は咆哮する。

暗い風はわたしの上を過ぎる。

星座は廻転し、やがて分裂してしまふ。

それはわたしに古典の世紀を想はせる。

駱駝は腹匍つたまゝでわたしの夢を反芻する。

黒い地平の彼方をみつめながら。

鴉の群はわたしの頭上に輪を描いてゐる。

わたしは聖者のやうに寂しく凍原を歩まう。

鴉の輪は乱れる。わたしに何を啓示するのだらうか。

わたしは沙の上に文字をかく。

すると風は裂しくわたしの言葉を吹き消してしまふ。

お、い、えん、た、る、い、め、い、ぢ。

折りからの夕映えにこの言葉はさつと彼方の沙丘に反映した。

わたしは寂しい沙丘の陰から一個のミイラを掘鑿した。
それは女人の裸形であつた。

その額と鼻にわたしは自分の同族を認めた。

その裸形のおもてには不易の年齢が刻まれてゐた。

わたしはその重量を怪しみながら、愚にもこれを抱かうとした。ア

ダムのやうに。

と忽ち女體はわたしの腕の中に崩壊してしまつた。

一握の土塊を握りしめながら、わたしは烈しい眩暈と闘つてゐた。
旋風のたゞ中に捲込まれながら。

沙の波濤を越えて月が招いてゐる。

わたしの衣裳も皮膚もふえるむのやうに透きとほり、

わたしの精神は蒼い焔を吐きだす。

やがてわたしに夜の獣らが扈從してきた。

あゝ わたしは自らを神とするのだらうか。

わたしは右手をあげて従者らをかへりみた。

そこには月光に浮彫された石の群像。

石馬 石象 石犀の列だ。

あゝ わたしもつひに一個の石像と化して、
沙の上にしろじろと煙つてしまふのだらうか。

わたしは北にひきつけられてみた。磁針のやうに。

「ドブガンツール湖」はその方向であるから、

七ツの数はわたしに救ひを想はせたから。

湖は淫靡な黒土地帯に、醜悪な丘陵地方に、汚穢な大湿地に、
はては怠惰な草原に、貧乏な沙漠に、孤独な凍原に潜んでみた。

わたしはこれらの湖を求めて彷徨したが、

残りの一つは遂に見出し得なく、

凍原のたゞ中に身も精神も凍りはて、

わたしは北を喪失してしまつたのだ。

救ひはもはやわたしには来り得ない。

33

1935-36

春のうた

朧おほろの夜ならで

すでにありあけの匂こむるあたり

わが枕べに響き来るは

氷の雫 柱時計の振子か

いまし輕轆として汽車は都会を去り行くならん

眩野をよぎり 海峡を隔て

しのゝめの来たる方にわが故国はあるなり

失ひし夢を求めんとすれども

かひなしや

たゞ泉の溢れるごとくに

そなたを想ふ

雨の歌

季節かけり
こゝろ傾ぐ
注ぐ雨ぞ
罅に滲む
濡れる胸に
すがた溢れ

しろき雨に
こゝろ溺る

逝ける「時」に
想ひ失せず
やけにたゞく
雨に暮れぬ

憑かれたるものゝ歌

黄昏の雑沓の中に

意味なき言葉を洩しつゝ

われ憑かれたるものゝ如く踳踉たり

家々の窓にはすでに灯あり

焉ぞ汝が家に帰らざる

わが乾ける唇を洩るゝは何の呪文なりや

しからず　そはすべてわが古き詩なり

鐘えたるわが青春の歌なり

実利なる人々はいかでかわが歌に耳を藉さんや

異様なる形相を怪しまんのみ

あゝ　わが歌は悉くかの濁れる空のもとに沈めり

そはすべて路傍の磔なり　馬糞なり

われなほ貧しき驢馬の背にありて歌はんかな

「西方に末だ微光あり」と

Nocturne.

かゝる凍てし夜
さまよひ出でたる心を知らず
街の灯遠く去り
暗き風に星ら瞬けり
そは傍ふひとのはちらふ眼ならめや
われ空に描ける貌のもと
冷き地上に臥さんかな

愚なり 菌の根あはず
幻を夢に結ばん術こそは
いまわが身凍らんばかりにて
心振れるごとくに痛むなり
そは傍ふひとの眼ならで
遠く冷く光る星ならずや
在るはたゞわが身独り
こは凍れる地上なり

弥撒うた

冷い風の中を小鳥らは疎らに飛んでゐる
やがて　それも見えなくなつてしまふ
わたしの洗面　そして　あ！　稲妻

暗い空に雲が白い光を放つ
わたしは夜の楽器を弾かうと
冷い壁に手をさしのべる

またしても何をか歌はんとするぞ
あゝ　ふるく卑しいわたしの彌撒うた

白い光は流れて　暗い空は鳴りはためく
わたしの指先はしびれて
絃音は断たれてしまふ
玻璃窓に写るはお前の如実の姿
あゝ　神様などと誰か言はうぞ

かつて神は

かつて神はわたしの行手に在し
その道はしろく雲の彼方へ
暖い雨は花々をもたらし
汀の若木と共に捧ぐる讃歌に
わたしの遅しい肩を嘉したまふ
神のゑまひであつた

いま妻子を伴つて再び野に立てば
風は烈しく言葉をひき裂き
礫を集めて文字を編まねばならない
雲の彼方からはすどい電光
もはやわたしは一切を失つてしまつた
雨は膚をたたく
わたしは野の石であるか

墓標

—— クラウサンで弾くに適した一年 —— ルナアル

十字架は傾きその横木はすでに朽ちてゐる
それは両腕を拡げて北の海にむかつたお前の姿
お前はわたしにうしろをむけてしまつたのだ
「吾等若シ互ニ相愛セバ……………」
その文字ももはや読み得ないほどこに

立枯れた野菊の叢が夕風にそよいでゐる
それはお前の愛した草花 そのまゝお前の姿
お前もはやわたしのものではないのだ
「言葉ハ肉体トナリテ……………」
その文字は今わたしの行手を扼すほどこに

変貌日

陽は苛烈に
路はしろい
雲は徐々に乱れて
風はすでに冷い
コンクリートの牆壁に沿ふて
わたしの影は匍行する
その行手には疲れた蝶が一匹

この裏返しにされた風景を
わたしは伝道者のやうに歩まう
幽な遠雷に耳傾けながら

告別

黙れ！ ランボー

この黄昏時のいらだゝしさ
みんな支度が調つたのに
これはなんといふ落着なさ
灰色の靄にわたしの手は冷く 化粧鏡は鈍い
その中を黒い馬車らは次ぎ／＼と消えて行く

鳩時計はあわたゞしく時を告げる
やがて精神病院の窓に灯が点つた
そして雨……………

鏡の中の黒い馬車らは次ぎ／＼と消えて行く
失せろ！ ランボー

恢復

小禽らのオルゴルは賑はしく

わたしは目覚める　　そしてはや祈禱を忘れてゐる

わたしの手には木洩れ陽が

静脈が枝のやうに拡がつてゐる

わたしはこゝに爽かな音を聞くのだ

背後に蹠音が近づく

寝椅子が折りたゞまれたので

わたしは目眩しさうに立上る

するとわたしの影は床に仆れてしまつた

歩きだすわたしの頭上には小禽らのオルゴルが……………

目
次

雨の歌	四二
憑かれたるものゝ歌	四四
Nocturne	四六
彌撒うた	四八
かつて神は	五〇
墓標	五二
変貌日	五四
告別	五六
恢復	五八

著書

津縣方言詩集

まるめる

昭和六年

詩集

わが鎮魂歌

昭和十年

鴉の裔

定限部拾五百

定價金八拾錢

昭和十四年五月三日印刷
昭和十四年五月五日發行

著者 高

發行者 青

印刷者 足

印刷所 昭

木 恭 造
本溪湖滿鉄醫院

木 實
大連市秀月台九七

立 孝
大連市加賀町六

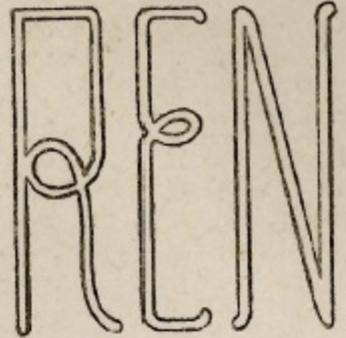
和 印刷所
大連市加賀町六

發行所

大連市秀月台九七ノ一ノ四
文 發行所

(振替大連一七四番)

裝釘・石川春男



聯詩 運動 雜記

「鴉の裔」に就いて

「鴉の裔」は聯詩人高木恭造氏の近業である。氏にとつてこれは第三詩集であるが、第一聯詩集でなかつたことばわれわれにまで大いに遺憾である。即ち、この詩集は、第一部の聯と第二部の散文詩的なものと第三部の抒情詩との三部より成立つてゐるのであるが、第一部の聯がやはり最も立派であるからである。

昭和十三年八月十八日第三種郵便物認可

新定詩誌・聯・第二巻 第八號

八月一日發行

定價十錢送料五

これは誤ないやうであるが、高木氏には優れた感覺が光つてゐる。「くらしい庭」の如き、その最も表面にうち出されたものであらう。「時間」の如きは感覺的象徴とでも謂へようか。感覺的象徴に抒情的なるものの加はつた時に、「鴉の裔」が成されるのであらう。「鴉の裔」は苦しみの唄を刻んだ組詩である。意識されたものであるか何うか知らぬが、頭韻が皆、カ行音から成立つてゐることに私は興味を覚える。

「鴉の裔」の苦しみは併し乍ら「東方」の明るさに救はれる。白金の希望が燃え上り「ほのぼのとみはるまふ」のである。興亞の一角に叫ぶ高木氏を見るのだ。形式的批判を最後にさせて頂かう。行の構成上、未だ十分に詩的でないものが二三見受けられる。それから、十二音句が完全な反覆になつてゐないものが多いことは残念である。勿論、變化を見ることによつて効果的なものもあるが韻律感上の滯滞を覺えるものが多し。この點、十二音句の使驅の技術的習練を切に望むものである。とまれ、特異な風貌を持つたこ

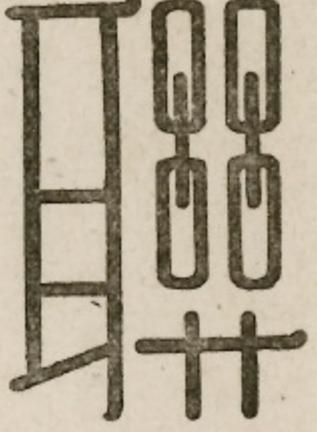
の聯詩の集録を祝して、この短評を終る。妄言多謝。(三村達磨)

編輯餘録

七八と兩月、歴史物語を書いてゐたため、氣にかゝりながら、リフレットの發行をおくらししてしまつた。その種の仕事に不馴のせいもあつた。が、編輯部も強化されたから、今後は遅刊しない。讀者諸氏の變らぬ御後援を願ふ。

高木君著の「鴉の裔」を三村君に批評して貰つた。この書は高木君の才能の美しさがうかがはれるもので、たのしい本だ。讀者諸氏も是非一本を購つてほしい。

このリフレットが出る頃には私の詩集「遠い海風」(第一書房版)も「われを咎めよ」(十字堂書房版)もともに發售されてゐると思ふ。「われを咎めよ」は聯詩社で發行する筈のところ、友人棟方寅雄君



新定型詩誌・聯・八月版

聯の詩學(15)

佐藤一英

徐々にひらけてくる詩想、多くの優れた詩は平明簡單なやうであるが高遠・深遠であつて容易にその眞髓にふれ得るものではなく、また、難解・晦澁なやうに思へるものも單純に人の心に觸れるものである。つまり一讀してよくわかるとか、わからないとかにかかはらず、何度くりかへし讀みたくなる慾望を起させるものである。

ある種の詩は音により、またある種の詩は色彩により、またある種の詩は意味により先づ人をとらへる。そして何度も繰りかへし讀ませながら、その詩的内容の奥所に踏み入らせるのである。

四季の配置の中で、年々の四季はいかに違ふことか、どんなにそれぞれ的美しさを發揮することか。しかしながら、夏・冬・變ることともなければ、秋が春に代ることもない。年々の美しさに生きるがよい。それは二度とくりかへさない。詩も正しくは一回きりのものである。作ることに於ても、讀むことに於ても。

詩に於て純粹に形式と呼ばれ得るものは音致だけである。しかし聯の規定する四十八音は形式であつて形式ではない。聯を形式主義だと難するもの多ければ形式の觀念さへ確かではない。

唄 (ヴェルレエ)

あさのかねまちにたゞよひ
あめこぼるせきもあへずに
あまぞらはむねにうつろひ
あたゝめぬれぬひととわれ

唄 (マラルメ)

ゆかりなきたはむれかなし
ゆくへしれずひとのこゝろ
ゆるしもえざるくちづけに
ゆきもけがるわがあしあと

唄 (ノワイユ夫人)

ましてしばしくろきめのひと
まひおりのことりのむれに
まひるまのかげはゆらぎて
またしてもゆめはやぶれぬ

唄 (ロオランサン)

かはたれのあきのみちへ
かぜすゝりなきたちまよふ
かわのねにむねはじかれて
かなしみはちにはひまわる

新生 長谷雄京二

溢るる風を噛みしめぬ
乳房の薫りふくらみぬ
新しき水ながる夜
木の實を割りてパンさきて

對坐

肩は火ぞわたる水邊
紅に死ぬるそよ風
五月雨に沈める百合香
舞ひ上る虹のときめき

ふるさと

稲田に呼びぬ、林にも
ふと肩たゞく青嵐
赤き鼻緒が切れかゝる
石蹴りし道、遠き屋根

獻詩

なにゆえかくもうるはしき
ながきいのちをたどる火よ
なきてゆるさんながおもひ
ながるゝなさけくみつくし

昭和十三年八月十八日第三種郵便物認可

昭和十四年七月二十五日印刷納本

昭和十四年八月一日發行

新定型詩誌・聯・第二巻第八號